



によひつぞく し なんしゅう

女筆続指南集 上（部分）

江戸時代、18～19世紀 は せ がわみょうてい 長谷川 妙 躰（書）

個人蔵

岐阜市内のとある旧家を調査したところ、江戸時代の蔵書が1,200冊以上伝来することが確認されました。『女筆続指南集』もそのうちの1冊です。本書は、女性書道家である長谷川妙躰が著した、女性向けの習字の教科書で、巻頭の挿絵では簪かんざしを手に教科書をなぞる女子の姿が描かれ、大人にとっても子どもにとっても本が身近な存在であったことが窺えます。

開館40周年記念企画展「お江戸ブックワールドー岐阜で花開いた出版文化ー」（3章「岐阜の蔵書家」）では、上記調査成果に基づき、江戸時代の岐阜の蔵書家がどういった本を収集し、どのような情報にアクセスしていたのかを取り上げます。

開館 40 周年記念企画展

お江戸ブックワールド —岐阜で花開いた出版文化—

2025.6.7(土)～7.27(日)

昭和60年（1985）にオープンした当館は、今年で40周年を迎えます。これを記念して、開館40周年記念企画展「お江戸ブックワールド—岐阜で花開いた出版文化—」を開催します。

江戸時代は出版業が盛んとなった時代で、それまでにないほど大量の本が生み出されました。本展では、岐阜が関係する和本とともに、岐阜の蔵書家が収集したコレクションも展示し、江戸時代の岐阜で花開いた出版文化をご紹介します。

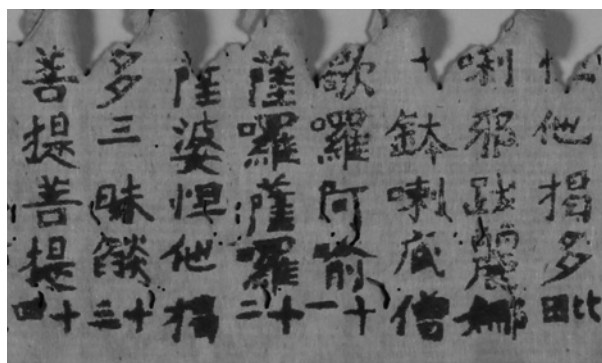
大河ドラマで江戸の本屋が話題ですが、ぜひ本展を通して、岐阜の出版文化の様相にも注目いただけましたら幸いです。

プロローグ 出版文化が花開くまで

この企画展のプロローグでは江戸時代までの出版のあり方をご説明します。

そもそも、日本に印刷技術が伝わったのはいつなのでしょう？はっきりとした年代は分かりませんが、現在確認できる最古の現存する印刷物として奈良時代の「百万塔陀羅尼」が挙げられます。

天平宝字8年(764)、孝謙天皇(後の称徳天皇)は国家安泰を願い、延命や除災を願う経文「陀羅尼經」を100万枚印刷させ、木製の三重小塔100万基の中に納めて、法隆寺や東大寺など十大寺に分置しました。これが「百万塔陀羅尼」です。



百万塔陀羅尼（部分）
奈良時代 8世紀 誓願寺蔵

では、どのように印刷されたのでしょうか？「百万塔陀羅尼」については、木の板に文字を彫って版を作る“木版印刷”とする説と、銅の版に文字を彫った“銅版印刷”とする説があり、どちらが正解かは結論が出ていません。

安土桃山時代には活字を組み合わせた活版印刷の技術が宣教師から伝わりましたが、くずし字が活版印刷に向かないこともあり、あまり普及しませんでした。そのため、江戸時代までの日本では木版印刷が主流だったのです。

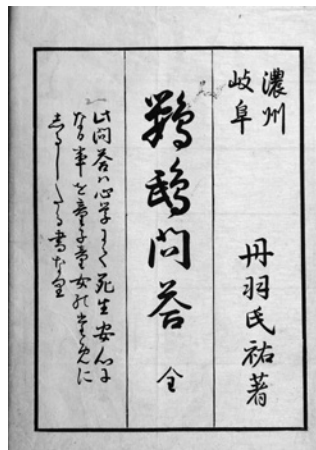
ちなみに、江戸時代より前の印刷物は寺で出版されることが多かったため、その大部分を占めたのは仏教書でした。本のジャンルが広がり、広く流通するようになるのは江戸時代になってからのことです。

1章 岐阜ゆかりの作者

続く1章では、岐阜の人が出版した本を展示します。

江戸時代になると、市井に暮らす町人や、農村で生活する百姓たちも、和歌や俳諧、漢詩などを嗜むようになり、自身の作品を本としてまとめるようになりました。また、京都や江戸への遊学などで専門的な知見を身に付け、本を出版する人たちもいました。

その1人に丹羽氏祐がいます。氏祐は岐阜町の材木商で、町役人などを務めるかたわら、心学（道徳的な教え）を修め、『鸚鵡問答』という本を出版しています。本書は儒学（心学）と仏教について論じた書で、例えば「儒学は現世のことばかりだが、往生できるのか？」という問いに対し、「悪いことは行なわない。良いことを行なう。これで地獄に落ちることがあろうか。」などと、問答形式で分かりやすく解説しています。



鸚鵡問答
文化14年（1817）
丹羽氏祐（著）
個人蔵

2章 岐阜を題材とした本

2章では、岐阜の名所や著名人などを取り上げた本をご紹介します。

岐阜は鶺鴒や金華山などの名所や木曾街道の宿場町があり、古くから本の題材となってきました。例えば、十返舎一九の『金草鞋』では、河渡宿や加納宿が登場し、主人公の狂歌師“鼻毛の延高”と、僧“千久良坊”の2人の珍道中が描かれています。



金草鞋 五編（部分） 文化10年（1813）序
十返舎一九（著） 喜多川月磨（画）
岐阜市歴史博物館蔵

また、狂歌（ユーモアのある和歌）の作者を取り上げた『狂歌画像作者部類』には、岐阜の人たちが19名選出されています。その1人が橘連事多留こと西川満阿です。満阿は長良川役所（長良川の流通を管理していた役所）の付問屋（役人）を務める傍ら、狂歌も嗜んでいました。



狂歌画像作者部類
（部分）
文化8年（1811）頃
いしかわまさもち
石川雅望（撰）
ほうていごせい
抱亭五清（画）
岐阜市歴史博物館蔵

3章 岐阜の蔵書家

続く3章では、多くの書籍を収集した蔵書家について取り上げます。江戸時代には武士や公家などの支配者だけでなく、町人や農村に暮らす人たちも書物を所有するようになりました。

岐阜市内のとある豪農の家にも、江戸時代までの本が220件1,222冊伝来しています。その中で、最も件数が多いのが漢学（中国の思想を学ぶ学問）に関する書物で、儒教の經典である「四書五経」などの知識が教養として必要だったことがうかがえます。次いで多いのが文学関係で、特に軍記物語や読本（挿絵の少ない小説）などを愛読していたようです。

なお、江戸時代の終わりにになると、海防や外国に関する書籍を収集しており、社会が動揺する中で積極的に情報収集に努めていた様子が垣間見えます。

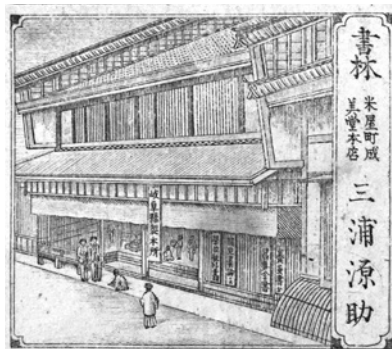
エピローグ 明治の出版社

最後のエピローグでは、岐阜町にあった成美堂に焦点を当てながら、江戸時代以降の出版事情に目を向けます。

明治時代初期は、銅版、石版、活版など新しい印刷技術が普及するものの、木版印刷も廃れることはありませんでした。そうした中、明治6年（1873）、岐阜県参事であった小崎利準（後の県知事）は、「本を出版できる書店が岐阜にはいない」として、笠松の三浦源助に声をかけます。利準の期待を受けて、源助は岐阜町で書店「成美堂」を開店しました。

岐阜県の出版業界をけん引した成美堂でしたが、明治24年の濃尾震災で店舗が焼失してしまいます。店舗を移し再起をはかるも、時代は木版から活版印刷へと変わりつつありました。そうしたこともあり、成美堂は出版業から販売業へと軸を移していくことになったのです。

成美堂の動向が象徴するように、明治の中頃までは、木版印刷が続いていましたが、時代とともに活版印刷へと変わり、江戸時代までの印刷技術は姿を消していったのでした。



岐阜市街新全図（部分）
明治22年（1889）川瀬善一（編）
岐阜市歴史博物館蔵

加藤栄三・東一記念美術館

立ち現われる空間 久野利博展

2025.4.15(火)~7.6(日)

はじめに

加藤栄三・東一記念美術館は、建物のおよそ半分が土砂災害特別警戒区域に位置することから令和6年6月より構造補強工事を実施し、来館者の安全確保のため休館していました。

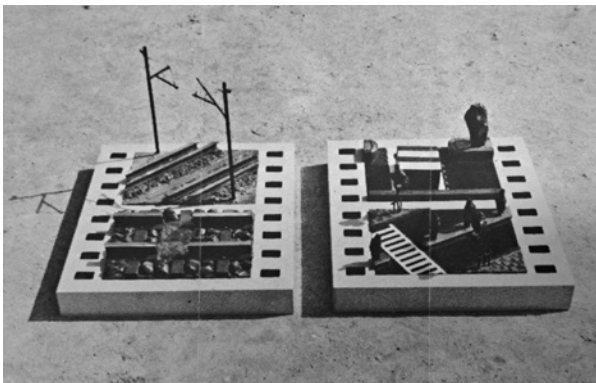
本年度、工事が完了し、再オープンを飾る最初の企画展として、国内外で活躍中の造形作家、久野利博の足跡を紹介します。

意識の中から立ち現われるもの

久野利博は昭和23年（1948）、愛知県大府市にある玩具販売を営んでいた家に生まれ、幼少よりおもちゃに囲まれて過ごした記憶が残っていると語っています。

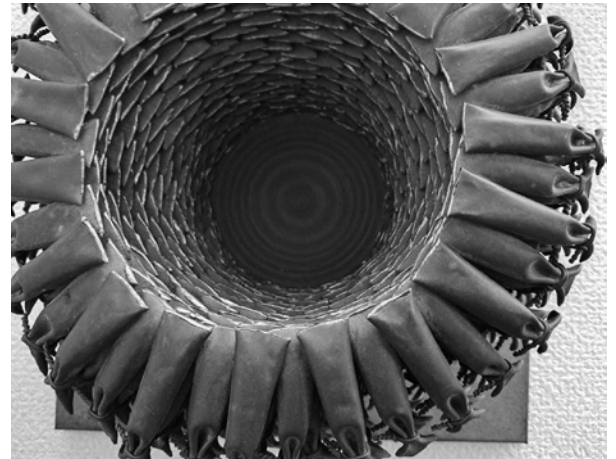
名古屋造形芸術短期大学で彫刻を学び、卒業制作は幼少の記憶をたどり制作したミニマムな町を題材にした造形物を出品。この卒業制作は、当時の名古屋造形芸術短大主任教授、石黒鏘二の目に留まり、その完成度は次世代の抽象彫刻の担い手と絶賛されるほどだったそうです。久野は石黒のすすめで行動美術協会主催の公募展に出品しました。

しかし、期待していたほどの評価が得られず、行動美術協会という団体展の入賞や審査方法等々に疑問を感じた久野は、行動美術への出品を止め、専攻科終了後の昭和49年（1974）5月、庄司達に推薦され、京都で初個展を開催しました。



《 Untitled 》

京都ギャラリー16で開催された初個展では現在のインスタレーション・アートとは異なる作品の形式、素材など様々な立体作品の創作を試みました。立体を配置する展示とは言え、その根底には現在の空間創出に繋がる余白へのこだわりがありました。後に、与えられた空間を広く見せるための小道具の配置や人間の行為を意識した想定区画は、久野が今でもインスタレーションを組む際に最も大切にしている要素の一つとなりました。



《 Untitled 》

意識の中で創り出された余白とは何でしょう。久野は、小道具が配置され、それは床面積を減らしているにも関わらず、空間を広く感じさせるための配置だといいます。壁面に展示された立体物の強さと床に配置された立体物の細部の強さを融合させ、一つの空間として作り上げていきます。

この演出は1970年代後半から80年代後半にかけて取り組んできた、空き地などの屋外に番線を配置したインスタレーションや、地下鉄の隅に積み上げられた土嚢からヒントを得て創出された作品など、日常空間の中に存在する余白を演出してきた経緯の中で作り上げた久野の思想と考えてよいでしょう。

今回の企画展では久野が国別日本代表として参加し、第24回サンパウロビエンナーレで発表したインスタレーション作品を、加藤栄三・東一記念美術館を設計した建築家、吉村順三の空間にあわせて再構成し紹介します。岐阜県初となる久野のインスタレーション・アートを体験してみてください。

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一 岐阜を描く 第2展示室の展覧会

2025.7.9(水)～9.28(日)

岐阜市美殿町で漆器商を営む商家に生まれた加藤栄三は家業の手伝いが肌に合わず東京美術学校（現東京芸大）へ進学します。10歳年下の弟、東一も商いが肌に合わず、父の反対を押し切り昭和15年（1940）12月、千葉県市川に住む栄三を頼り上京し、東京美術学校へ進学します。

二人は美術学校卒業後、関東に居をかまえ日展を舞台に作品を発表していきますが、多感な少年期を過ごした故郷への思いは強く、しばしば帰郷しては岐阜の風物を描きためていました。

岐阜への思いがわかる一説に、栄三が昭和43年（1968）12月下旬、山田申吾、東一らと共にインド・ネパールへ取材旅行に出かけたとき、ネパールのカトマンズを見て、飛騨高山とよく似た印象を受けたと述べていることからもうかがえます。



雨の三之町
加藤栄三
加藤栄三・東一記念美術館蔵

これをきっかけに栄三は飛騨高山へ取材に行く決心をし、帰国後の昭和44年（1969）、飛騨高山を訪れ高山祭を取材します。

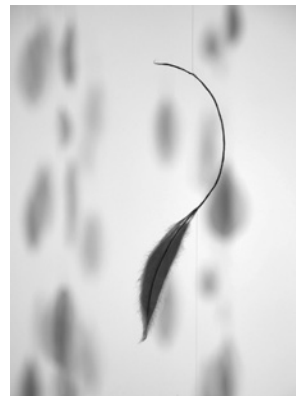
幻想的で荘厳な山車に魅せられた栄三が宵祭りの最中にもかかわらず、祭り行列を止めさせて熱心にスケッチを繰り返していると、その気迫に押された祭り行列の一行は取材に協力する展開になったそうです。

高山祭りを題材に制作した「飛騨」は、第2回改組日展に発表され、外務省買い上げとなりました。東一も平成2年（1990）から高山祭、

古川祭を取材しますが本画を描くことはありませんでした。

本展では、資料整理の中で新たに見つかった素描作品やこれまであまり公開していない長良川鵜飼、金華山などの素描・下絵等とあわせて、岐阜を題材にした本画を展示します。

第2展示室の展覧会



光を纏うⅡ 村上典子
令和6年（2024）個人蔵

また、第2展示室では岐阜県を拠点に活躍する作家を紹介します。7月からは女流画家協会に所属し精力的に作品を発表してきた洋画家の渡辺由紀子をはじめ、心象的な樹木の油彩画を描く関市出身の洋画家、新海修と和紙によるインスタレーション作品を手掛

けてきた各務原市在住の造形作家村上典子の二人によるコラボレーション展を開催します。岐阜に新たなアートの風を吹き込みたいと思います。是非ともお越しください。

■分館 加藤栄三・東一記念美術館■

第二展示室の展示

- 7月9日（水）～8月3日（日）
「渡辺由紀子 展 シリーズ kehai—もうひとつの宇宙—」
- 8月6日（水）～8月24日（日）
「新海修×村上典子二人展 樹・光—交感する造形—」
- 8月28日（木）～9月28日（日）
「それぞれの道—山本眞輔・澄江・眞希—」

■本館特集展示（2階 総合展示室内）■

- 6月28日（土）～10月22日（水）
「Tools—子どもたちが見た昭和の日常—」
150～40年くらい前に使われていた道具を集め、当時の暮らしを紹介する展覧会。「尋常小学校」「家のなか」をジオラマ再現しており、当時の情景を体感できます。

■分室 原三溪記念室の展示■

- ～7月6日（日）
「三溪の兄弟弟子～野村藤蔭に師事した人々～」
- 7月8日（火）～8月17日（日）
「佐波の治水家・山田省三郎」

上記の日程は、都合により変更する場合もございます。ご了承ください。

研究ノート

岐阜県で使用された明治期の教科書

— 検定教科書を中心に —

宇野 綾夏

政治・文化ともに大きく変化していった明治時代、欧州列強に追いつくため、政府は明治5年（1872）に「学制」を發布し、学校教育制度の確立を目指した。その後、明治12年～明治18年の「教育令」期、明治19年～明治22年の「第一次学校令」期、明治23年～明治33年の「第二次学校令」期と続き、近代学校教育制度は発展していくこととなる。今回は地方での教育制度が固まり始めた第一次学校令期から第二次学校令期の間で主に使用された教科書、つまり府県ごとで教科書を採択できるようになった「教科書検定制度」が行われた期間の教科書に注目して、岐阜県教育方針について考えていきたい。

教科書の検定制度

明治19年（1886）4月、小学校令第13条で「小学校ノ教科書ハ文部大臣ノ検定シタルモノニ限ルヘシ」と規定がされ、文部省が検定し承認を受けた教科書の中から、各地方の審査委員会が採択した教科書を使用することとなった。のちに審査委員と教科書出版会社との間で贈収賄事件が発生し、教科書検定制度は廃止され、文部省（国）が決めた教科書を使用する「国定教科書制度」へと移行する。

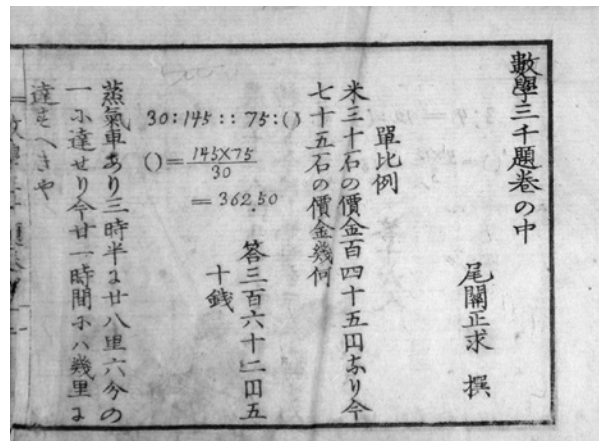
文部科学省ホームページでは検定教科書の内容区分を大きく三つに分けているが^{（注1）}、本稿では、岐阜県の教科書の変遷に合わせて、明治19年～明治22年を第一期、明治22年～明治25年を第二期、明治25年～明治34年を第三期、明治34年以降を第四期と仮定して、各時期の教科書とその特徴を記述する。

第一期の検定教科書

教科書の検定制度が設けられたことで、岐阜県も明治19年（1886）9月25日、県令第28号によって通知し、岐阜県内で使用する教科書を定めた。制度の対応を迅速に行うためか、内容は明治15年に規定された岐阜県小学校教則の岐阜

県小学校教科書表にある教科書と同じものが多く採択されている。

出版社を見ていくと、東京の有力な教科書出版社である「集英堂」や大阪の書店から出版された教科書が選出されている中、笠松町出身の三浦源助（成美堂）が出版に関わった教科書が多く採択されている。つまり、地方の出版社であっても、積極的に教科書の検定申請を行い、岐阜県は岐阜に関係する出版社の教科書を採択していたことが分かる。



数学三千題 巻の中（部分） 三浦源助発行
明治18年（1885） 岐阜市歴史博物館蔵

第二期の検定教科書

検定制度の規則に則り、明治22年（1889）5月13日、県令第28号により、新採定教科書表を公布した。第一期からの変更点で特徴的なのは、文部省が編輯した教科書が採択されていることだろう。文部省は検定制度を開始してから、自ら教科書の編纂を行うようになり、「読書入門」や「尋常小学読本」といった国語科の教材を出版した。文部省が出版した国語の教科書は、これまでの教科書より著しく進歩しているといわれており^{（注2）}、岐阜県がその教科書を採択したのは、より教育水準の上昇を見込んだことが理由のひとつとして考えられる。

第三期の検定教科書

明治25年（1892）12月、県令第82号により、新たに教科書が採択された。この時期の特徴として、修身科教科書が採択されたことが挙げられる。明治20年5月の文部省通牒で、修身科は教科書を採択しないこととされたため、岐阜県は修身科の教科書を規定していなかったが、明治23年に「教育ニ関スル勅語」が發布されたことにより、修身科が教育において最重要教科

に位置づけられると、修身科での教科書採択がされるようになった。岐阜県では、金港堂^{きんこうどう}という東京で当時大手であった教科書出版社が発行した教科書を採択している。



実験日本修身書 巻一～巻四、巻六
金港堂書籍発行 明治26年（1893）
岐阜市歴史博物館蔵

第四期の検定教科書

明治34年（1901）5月20日県令第21号で、国定教科書となる前の最後の教科書改定が行われた。第一期の頃と比べると、岐阜県で発行された教科書からの選定は減少しており、明治35年の時点で、岐阜県で発行された教科書を使用している教科は、国語（習字）・算術（尋常小学校のみ）・地理歴史の三教科となっている。それは、教科書の販売競争が激しくなり、地方の出版社がその競争から振り落とされた結果であるといえよう。

岐阜県で出版された教科書

教科書の検定制度が始まり、教科書の採択が行われるようになった明治19年（1886）から、岐阜県で採用された教科書を改めて見てみると、習字や地理歴史の分野で岐阜県内にある出版社が発行した教科書の使用が多く見受けられる。特に地理歴史で使用された教科書は、『岐阜県地誌』や『岐阜県地理歴史』など、岐阜県の各市町村の地理情報や名産品を紹介した、岐阜県独自の教科書であることがわかる。

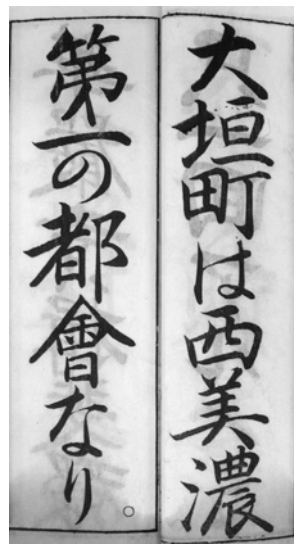
明治14年の「小学校教則綱領」を受けて、明治15年3月29日付の県布達丙第22号により「岐阜県小学校教則」が告示された。これは、岐阜県での小学科の区分や学習する教科、授業の日時や休暇などを定めたもので、教科ごとの指導内容も示されている。第12条「地理」には、「…日常生徒ノ親ク目撃シ得ル所ノ、学校近傍ノ地形ヨリ説キ起シ、…」と記載されており、普段から生活している地域についての理解を深める

よう促している。地理歴史の教科書が日本全国ないしは世界各国の地理を網羅している教科書とともに岐阜県の地理歴史をまとめた教科書が採択されているのは、この条項に則ったものであるが、子どもたちの生活する地域の理解を深めるとともに、郷土愛を育むための教育方針であると考えられる。

一方習字の教科書はどうだろうか。地理歴史の教科書に比べて、教科書の内容構成に大きな地域性は見られなかった。しかし、三浦源助が出版した「高等小学校用 男児習字帖」には、「武儀の牧谷よりは美濃紙を出す」「大垣町は西^と美濃第一の都會なり。」という文が記載されていることから、地域性が見て取れる。

『数学三千題』や『尋常小学校用習字帖』などを出版した三浦源助、『日本略史』の翻刻や『岐阜県地理歴史』を発行した岡安慶介など、検定教科書期には岐阜で教科書出版を担った人たちの出版物が多く採択されている。

岐阜出身者だからこそ、岐阜にちなんだ文章や内容が含まれており、岐阜県で授業を受ける子どもたちにとって、生活する地域への理解や愛着がわきやすいものとなっている。検定教科書期以外にも、特質した教育内容を設けていた学校も見受けられたため、今後はそれらに注目し、岐阜県で行われた教育について研究していきたい。



高等小学校用 男児習字帖
第四学年
三浦源助発行
明治34年（1901）
岐阜市歴史博物館蔵

（注1）学制百年史編集委員会「五 国定教科書制度の成立」文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317624.htm（2025.5.2）

（注2）平田宗史著『教科書でつづる近代日本教育制度史』1991年より

参考資料

『岐阜県教育史 近代 通史編 一・二』岐阜県教育委員会編集

『岐阜県教育史 近代 資料編 一・二』岐阜県教育委員会編集

受贈資料（本館）

令和6年度は、下記の皆様に貴重な資料をご寄贈賜りました。厚くお礼申し上げます。（敬称略）

河崎 太郎	河崎家文書	一式
下條 春憲	火縄銃 銘 摂州住藍谷権右衛門作	1挺
堀 秀章	従軍関係資料	一式
近藤 誠宏	近藤写真事務所関係資料	一式
大森 章子	加納鉄哉作「鬼念仏像」	1軀
田堀 雅尚	岡崎風廬坊筆「遊びはよ…」発句賛	1幅
村瀬 眞一	村瀬庄吉家資料	一式
北川 量三	しゃもじ、はし、紙のマスク（みそぎ祭り）	3点
北川 孝太郎	赤禪 赤鉢巻（みそぎ祭り）	2点
中島 文雄	襖下張り文書	一式
内山 美登里	教科書（中等育児・保健一） 教科書（育児・保健二） 教科書（中等被服三） 教科書（家政全）	4冊

利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時
（歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
の入館は午後4時30分まで）
※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始
（12月28日～1月3日）
（月曜日が祝日の場合はその翌日）
※8月12日は開館、その他特別展・企画展開催中は
変更することがありますのでご注意ください。

- **観覧料**
高校生以上…310円（団体250円）
小中学生 …150円（団体 90円）
両館共通で観覧される場合
高校生以上…520円（団体410円）
小中学生 …260円（団体150円）
※団体は20人以上
※特別展は、その都度料金を定めます。
※下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の
方は証明できるものをご提示ください。（ミライロ
ID可）
①岐阜市在住の70歳以上の方（特別展を除く）
②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手
帳、指定医療費（指定難病）受給者証又は登録者証、

- 小児慢性特定疾病医療受給者証又は登録者証の交付
を受けている方、及びその介護者1名様
③家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下
の方と同伴する家族（高校生以上）の方（特別展を
除く）
④岐阜市内の小中学生
◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

- **交通案内**
《歴史博物館・加藤栄三・東一記念美術館》
JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行
きになり、「岐阜公園・岐阜城」で下車、徒歩約5分。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・
東一記念美術館があります。
お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用くだ
さい。
詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。
<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



- 《原三溪記念室》
岐阜バス西部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに
乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分。岐阜バス西部三田洞
線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、
徒歩すぐ。

博物館だより No.120 2025.6

編集・発行 岐阜市歴史博物館
（分館） 加藤栄三・東一記念美術館
（分室） 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ————— ☎058(265)0010
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ————— ☎058(264)6410
〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階 — ☎058(270)1080